

形の技能評価原論(7)－「力避」の理合いについて

○村田直樹(講道館) 藤堂良明(筑波大学) 松本龍弥(都柔連)

I. 緒言

形は理合いで構造化されている。理合いは受、取双方の施技に存する。理合いの概念は技法と心法で成り立つ武術的攻防の合理性である。技法とは攻防の合理的動作を、心法とは攻防の心理を指し、ここに心理とは、「肉体上で人を制し、制せられざる(嘉納, 1889)意志」である。これを換言すれば、技法=合理的動作、心法=攻防の意志と言えよう。

古式の形とは、往時の兵(つわもの)が戦場で繰り広げた鎧組討を基にして出来た形である。本論では「力避」の理合いを解明する。

II. 研究方法

1. 技法の解明—力避の動作を局面に分ける—「教本」の分析
2. 心法の解明—各局面に於ける攻防の意志を解く—実技及び内観の分析

III. 結果と考察；力避の理合い—技法と心法

取 1. 道場の中央に正面を右にして自然本体で立つ。**莊重優雅な心**

受 1. 静かに取の左側から弧を描くように回って接近し、約1歩の間合いをとつて取と向かい合う。**莊重優雅な心**

受 2. 受は大きな動作で両手の掌を下に向け、横から前に上げ(右手を上、左手を下に)、手首のあたりが交差するようにしながら右足を1歩踏み出し、両手で取の前帯を上から取ろうとする。**武勇と攻撃の緊張に満ちた心**

取 2. 取は受の両手が前帯に掛かる寸前、腰を退くと同時に右足を僅かに右後隅へ退いて受の攻撃を避ける。受が前帯を取れずに一瞬前に崩れた時、取はすかさず左手(親指を上にして)で受の右手首を外から内へ払い流しながらこの手首を握って前方へ引く。取は右足をさらに退いて体を右に開きながら右手(手背を下に向け親指を上にして)で自分の左手の上から受の右肘の上部を外側から握って引き、受をその右前隅へ送り出す。**生死の懸かる緊張と必勝の信念に満ちた心**

受 3. 受は体の安定を保とうとして右足から半身になりながら送り出される。**生死の懸かる緊張と体勢挽回を期する心**

取 3. 取は受の変化に乗じて右前隅に移動し、右手で受の右肘を斜め上に押し上げ、左手を受の左上腕部の中ほどにあてて制しながら、数歩移動して受の体を両手で抜き上げ気味にし、その右胸部を受の背部につけ、受をその上方へ浮かし崩す。**柔の理を施し得て優勢を知る勝利確信の心**

受 4. 受は上体を反らして爪先立ちになる。取が体の制しを緩めると、受は両踵を畳に着けて体の安定を保とうとする。**最期がよぎり始める恐怖の断末魔と闘う心**

取 4. 取は右手を受の右肩の前に掛け、左手は受の左腕から左肩に摺り上げて前に掛けると同時に左足を1歩大きく退いて左膝を着き(足先は爪立てる)、体を低く落とす(右膝は立てたまま)と同時に両手で一気に受をその真後ろに引き落とす。**敵を屠(ほふ)る意気天を呑む心(起倒流寺田派 井上彰二師範)**

受 5. 受は右足を大きく1歩右後方に開き、右手で畳を打って受身をした後、上体を起こし、「体」と同じ要領で開脚長座の姿勢をとる。**静謐な心(無心)**

IV. 結論

技法に集中し過ぎて心法を考慮しない施技に比べ、心法即ち攻防の意志を働くさせた施技には、その動作に武術的気配が漲(みなぎ)り、より高い水準の表現が期待されよう。